

園児の性差による美術鑑賞活動の学習成果に関する実践研究

～ナラティブ・アプローチによる男女の発話行為内容の分析を通して～

附属平野中学校 池永 真義（申請代表者）

事業の目的

保育所・幼稚園にかかわる性差・ジェンダー研究はどの程度進んでいるのか。先行研究を見る限りでは、小学校以降の年齢層を対象とする理論的・実践的研究に比べるときわめて少ない。このことは、保育所や幼稚園についてのジェンダー・フリーにかかわる取り組みが少ないことの証左でもある。ただ、これら「幼児期のジェンダー形成と保育環境との関係を実証的にとらえた研究」においても、

- ① 保育者や保護者の意識に関する調査研究（質問紙の活用）
- ② 設定された場の中での実験的調査
- ③ 日常的活動の場における行動のコーディングをともなう観察調査（ごっこ遊びにおける役割意識や権力関係などの分析）

などに区分されうる研究が展開されている。そしてこれらのほとんどは、発達心理学を基盤とする性差研究として行われている。筆者が専門とする美術（造形）教育でも、たとえば②の次元で描画発達における性差研究がみられる。ただしそれらは、描画能力における技巧性の発達の違いを分析するものや、グッドイナフテストなどの活用といった、きわめて限定された実験研究である。

そこで本研究では、鑑賞した内容や鑑賞した作品から園児がインスパイアされた直感的アイデアに基づく造形表現そのものを主な分析対象とした。つまり、彼らの行動や保育者と園児、園児間の対話（ことばのやりとり）といったジェンダー・ディスコースだけを分析するのではなく、あくまでも美術教育の視点から造形学的アプローチを通して、性差・ジェンダー研究を行った。このような、具体的な鑑賞内容や造形物を主体とする美術的視点からのジェンダー研究は、管見ではこれまでみあたらなかった。本研究を通して、幼児の視覚的表現や作品の解釈内容を、園児の心理（裏側）を読み解くための手段としてではなく、主体的な創造内容としてとらえ、「ジェンダーと表現」をテーマに美術的表現という相の広がりの中で、性差の違いや共通項を探ることができればと考えた。

活動と成果の概略

（１）幼稚園と中学校の連携・協働による実践研究として

本研究は、筆者が長らく携わってきた平野地区 5 校園共同研究に位置づけた形で行った。附属幼稚園の園長や教員と中学校教員との協働により、新しい視点から表現活動にかかわる性差・ジェンダー研究ができるのではないかと考えた。ただ、このような連携教育は、対等互惠の原則がふまえられ、協働した相手に貢献できる実践研究となることで初めて成り立つ。したがって、実験研究として園児の活動を構想するのではなく、あくまで園児が楽しく、主体的に取り組める日常の保育として実践を考える必要があった。

（２）出前保育の題材について

今回の出前保育では、オリジナル題材「おやまを こえてやってきた 25人のキューピーちゃん」を開発した。まず筆者は、日本の伝統的な宗教絵画（仏画）に登場する菩薩から、西洋絵画に登場するキューピーを連想し、キューピーを菩薩に見立てた「来迎箱庭」を制作した。キューピーはもともと多神教のギリシャ的図像に登場し、後に一神教のキリスト教図像に取り込まれた経緯をもつ。つまり宗教的キャラという部分を共通のパラメーターとして、見た目は似ても似つかぬ両者を結びつけたのである。

キューピーは、1909年に米国のイラストレーター、ローズ・オニール（1874年-1944年）がキューピッドをモチーフとしたイラストとして発表された。後に人気が出て、立体化された。カブの様などが

ったひと房のヘアースタイルや、丸く大きく左右どちらかを見つめている目、ピンクに彩られ少し膨らんだ頬、微笑むようにわずかに上がっている口角、ぽってりとしたおなか、といった特徴がある。今回、このキューピーに目をつけたのは、「判別できない性別」という特徴をもつキューピーを、造形活動の主人公として園児に扱わせ、ある場面を表現させることで、何らかのジェンダー形成にもなう示唆が得られるのではないかと考えたことによる。幼児を対象とするジェンダー研究をみると、園児は周囲から影響を与えられるだけでなく、自ら主体的にジェンダーを実践する主体になりうるとの知見が見られる。ただ、それらは幼児の役割やその変容であったり、子ども同士の関係における「言語（のやりとり）」を対象にしているものがほとんどである。

本実践では、性別の認識が不能なキューピーを使い、また全く自由に造形させるのではなく、来迎図を鑑賞させ、その“物語の続きを創る”といった条件（仕掛け）をつくった。これにより、男児、女児それぞれが、どのようなシーンやイベント（出来事）を表現するのか。やってみないことには、ちょっと予想できなかった。

（3）実践の概略

◆前半の活動（仏教絵画「来迎図」鑑賞活動）

- ・日本の古典絵画（3点）

①風景のみの山水画、②阿弥陀と菩薩が山を越える前のシーン、③山を越えて下りてきたシーン

の3点を順番に見せる。 ※スクリーンに映し、一斉に鑑賞する。意見を自由に言わせる。

- ①風景のみの山水画：『月夜山水図屏風』（曾我蕭白筆・江戸中期）右隻のみ
- ②阿弥陀と菩薩が山を越える前のシーン：『山越阿弥陀図』（作者不明 鎌倉）
- ③山を越えて下りてきたシーン：『阿弥陀二十五菩薩来迎図』（作者不明）

- ・保育者が制作した『キューピーちゃん来迎図』を見せる。

※スクリーンに映し、一斉に鑑賞する。異なる角度から、二・三枚程度、見せる。



◆後半の活動（30分程度）

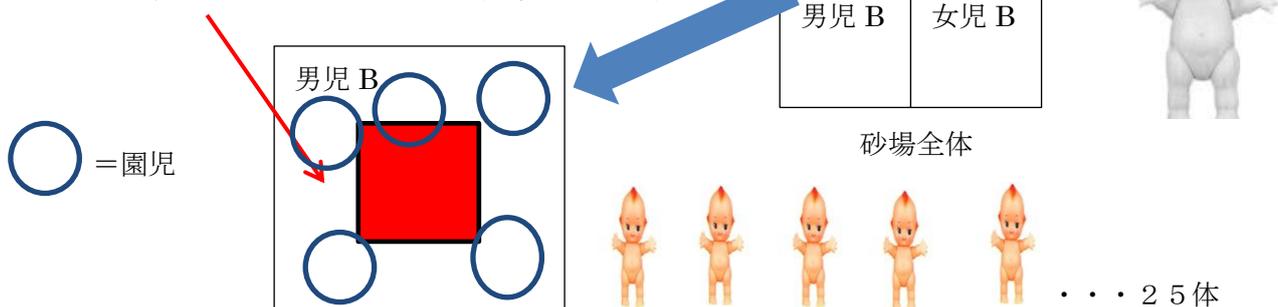
- ・砂場の前に集合。

5人のグループ（男子A/B・女子A/B）に分かれる。

※右のように、四つに区画しておく。

※準備物は、あらかじめセットしておく。

遊具、ミニ・キューピー人形（1班に25体）



(4) 考察・成果

現在、幼稚園教員の協力ですとった園児の発話行為内容の記録をもとに考察中であるが、園児らがつくった造形物を考察した結果、次のような傾向がみられた。そして、男児の2グループと女児の2グループとで、はっきりとした性差による違いが表現方法や表現内容から見受けられた。

・男児Aグループ

並べ方はやや無秩序だが、てっぺんのキューピーを頂点に、はっきりとヒエラルキー（3層）ができています。このグループは、4グループ中、最も早く人形を並べた。その後は目標を達成したかのように、横に溝（川）をつくり、山の横で遊び始めた。

・女児Aグループ

規則正しく、同じ方向に一直線で山を縦断させた。麓には、穴のあいた、きれいなさら砂の山に一体のキューピーを列に正対させ、出迎えさせている。この部分をつくった女児は、最後にこのキューピーの頭にさら砂を上からふりかけるといふ、ある種の儀式的行為を想起させる行動をとった。

・男児Bグループ

この男児のグループも、もう一方の男児と同様、一列ではなく山の半分にキューピーの群衆を集中させている。ただ、起伏部分は二列にして、降りてくる動きが感じられる点、麓部分はすでに横並びで整列させている点などが大きく異なる。麓には浅い正方形の庭園が造られている。

・女児Bグループ

この女児のグループも、やはり別の女児のグループと同じくキューピーを一直線で山を縦断させている。ただ、並べ方の秩序が乏しかったり、山の起伏が荒いため、人形を胴体まで埋め込むなどの工夫を行っていた。



男児Aグループ

女児Aグループ



女児Bグループ

男児Bグループ

筆者や幼稚園の保育者の観察から見る限り、園児らは異なるグループの活動には目もくれず、きわめて意欲的に活動していたことから、同姓のグループから影響を受けたことは考えられにくいと感じている。

これらの傾向から、描画発達の性差研究が指摘するような、単純に男女の技巧性の発達上の違いにとどまらない要因があることが考えられる。女児のグループらがつくった一列に並ぶ表現は、明らかに空間移動をとまなう動的表現であり、ヒエラルキーのない並べ方である。一方の男児のグループでは、ある一定の階層性が感じられ、人形をそれぞれの場所にとどませた静的表現である。

『ジェンダー学の最前線』（世界思想社2008）を著したオーストラリアの社会学者 R.コンネルもいうように、「分析されるのは言語だけではない。ジェンダーの象徴機能は、服装、化粧、しぐさ、写真や映画、それに建造物のような、より非人間的なタイプの文化においても作動」する。そして発表者は、さらにコンネルがいう「象徴関係」（ジェンダーの4つの次元の中の一つ。後述。）において、「鑑賞活動や造形活動における表現」も含めたジェンダー研究が可能になる、と考えている。

今後の予定と研究の発信

本研究の成果については、本報告だけでなく、心理学・美術教育関係の研究論文等の媒体により広く発信する予定である。また、3月4日（火）に本学柏原キャンパスで開催された「大学教員と附属教員との研究交流会」にて、「全ての校園種・教科・領域に貢献できる美術鑑賞教育の実践創造～ビジュアル・リテラシーで支える“研究と実践の協働”～」をテーマとして、他の実践事例と併せてその概要報告（ポスターセッション）を行った。